

【学術論文】

日本敗戦による国境の変容と人の移動
—— 在台沖縄出身者の回想を手がかりとして ——

Changing National Boundaries and Okinawan Repatriation
from Taiwan after the Demise of the Japanese Empire:
Using Memoirs and Oral Histories

菅野 敦志

要旨

本稿は、1945年の日本敗戦と植民地帝国の消失によって国境が新たに描きかえられた際の、人の移動をめぐる沖縄出身者の経験と回想に焦点を当てて検討するものである。沖縄から台湾へと渡った人々は、第二次世界大戦の終結に伴って植民地での生活基盤を喪失し、引揚げという名による沖縄への送還を余儀なくされたが、そのような国境の変容の下でのさまざまな変化、とりわけ「内地人—沖縄人—本島人」の関係性とその変容はいかなるものであったのか。この課題を探るため、沖縄出身者の台湾経験の回想録やインタビュー記録を史料として用いつつ初歩的な検討を行った。その結果、台湾人や中国兵との接触を通じて、沖縄と台湾の親密な関係性を示す「琉球人」としての扱いなど、日本本土出身者とは異なる固有の経験とその様相を見ることができた。結論として、例え植民地支配や戦争を背景とした「影としての移動の歴史」であっても、一国史を中心とする公式の歴史記憶からは抜け落ちてしまう草の根レベルでの接触や交流を記録化し、共有化することの重要性を提起した。

キーワード：台湾、沖縄、人の移動、引揚げ、回想録

I. はじめに

近年、アジアや環太平洋に焦点を置いた「人の移動」に関するプロジェクトの成果や、日本の最南端である沖縄とかつての帝国の最南端であった台湾の関係性に着目する研究が散見されるようになってきている¹⁾。移民研究は、固定的かつ中央の政治を中心とする一国史による理解ではなく、国境や境界を越えた人の移動から、流動性と諸地域間の交流の様相、そして変容するアイデンティティのあり様を示唆してくれる点で重要である²⁾。沖縄と台湾の人の移動をとりあげた研究も近年増加の傾向が見受けられるが³⁾、移民と引揚げにまつわる学術的な関心が高まりを見せる一方、社会的な関心や評価の問題を考えた際、野入直美による指摘は重要である⁴⁾。

野入は、台湾から沖縄への引揚者を扱った研究のなかで、沖縄における移民と開拓の歴史に対する評価をめぐって、「沖縄から海外に移民した人びとが『世界のウチナンチュ』として光をあてられ、『海外雄飛』と称

揚されているのとは対照的に、沖縄の台湾引揚者がその植民地における体験を語ったり、それに社会的な関心が集まったりする機会はほとんど目にする事ができない⁵⁾と述べる。つまり、言い換えれば、もし移民と開拓の歴史にも「光と影」があるとして、ハワイ、北米や中南米といった方面への移民と開拓は語り継がれるべき苦難と栄光の「光としての移動の歴史」であるなら、かつての「外地」（台湾、朝鮮半島、満州、南洋群島等）への移民は日本の植民地政策に加担するものとして、その加害責任が付随するがゆえに「影としての移動の歴史」という評価が含まれるものであるといえよう⁶⁾。

だが、そうであっても、人々による移動がもたらした経験の意味と意義について学術的な検証を続けることの必要性は言をまたない。それは、時間の経過と公的なレベルでの歴史化が進めば進むほど、そこから抜け落ちてしまいがちとなる民間レベルでの記憶や記録をいかに掘り起し、当時の状況に対する同時代的な理解に近づきつつ、それを後世に継承し続けることができるのかという

課題があるからである。

そこで本稿では、日本と周辺諸地域における「人の移動」について、1945年までの50年間にわたり沖縄を始めとする各地から台湾へと移動し、引揚時には3万人ほどいたと考えられる沖縄出身者の⁷⁾、特に日本敗戦による台湾からの引揚げの前後の様相に焦点をあてて検討を進めたい。台湾から沖縄への人の移動に関しては、日本という国民国家の枠組みや一国史だけでは見落とされてしまいがちな、沖縄出身／籍を有する者の台湾での体験や、現地住民との関係性がどのようなものであったのか、という点にも注意したい。日本の敗戦によって、統治側に属し、現地住民に対して優位を誇った立場が「敗戦国民」として凋落した際に、在台沖縄籍民、疎開者⁸⁾や軍人軍属は実際のところいかなる状況に直面し、国境の変容を前に、いかなる多様な経験をしたのであろうか。

これらの課題に向き合うため、本稿では、沖縄籍を含む「沖縄出身者」の台湾経験の回想録を活用することで、日本の敗戦とともに描きかえられた境界下での変容および「内地人—沖縄（琉球）人—本島人」⁹⁾の関係性について初歩的な検討を行ってみたい¹⁰⁾。沖縄出身者の台湾経験の回想録を収めた引揚者の記録¹¹⁾のなかでも、書籍として刊行されたものでは、沖縄出身の軍人軍属による回想として『琉球官兵顛末記』（1986年）¹²⁾と『回想蓬莱島』（1997年）¹³⁾があり、台湾協会『台湾引揚史—昭和20年敗戦記録』（1982年、以下『台湾引揚史』）¹⁴⁾にも沖縄出身者による回想が掲載されている。以下、そのような引揚者による回想録に加えて、個別に採集したインタビュー資料も用いつつ、50年間の日本統治を経た後、敗戦によって状況が一変することとなった1945年直後の台湾における沖縄人の経験とその検討を通じて、東アジアにおける人の移動と国境の変容の一断面を明らかにしてみたい。

II. 『台湾引揚史』にみる台湾人と沖縄人

終戦時の状況をめぐる沖縄出身者の回想について、まずは『台湾引揚史』をみてみたい。

ここで指摘すべきは台湾人—沖縄人の関係性、つまり、終戦時に多くの沖縄出身者が「内地人」とは異なる待遇を台湾人から受けることになった点である。

台湾総督府に勤務し、戦後は沖縄で琉球政府の文化行政の中心的人物となった川平朝申¹⁵⁾は、日本の敗戦から2カ月後を経ると同時に中華民国への正式な復帰を約2週間後に控えるなかで（台湾省光復式典は1945年10月25日に挙行）、権威をふるっていたかつての統治機構や権力者に対する反日的雰囲気は台湾社会において、そのような職にあった「内地人」を「沖縄人」の名

でもって救出した方法について以下のように述べている。

中華民国34年（昭和20年）10月10日の双十節では、取材や出席を準備していた台湾総督府官房情報課職員の間は、ボイコットされ、台湾総督・安藤利吉大将と随員のみでの出席で、林猷堂氏、林茂生教授らの、反日的大演説が行われ、以来、台湾の各地では、反日的な不祥事件が頻発し、特に日本人の特高警察官、経済警察官に対する迫害が昼夜行われるようになり、沖縄県人の名で救助した例も少なくなかった¹⁶⁾。

日本が国家権力を喪失した後、その権威に依拠していた人々は台湾人から報復処置を受けた¹⁷⁾。もちろん、権力側に立ち、台湾人から好感を持たれていなかった者は、沖縄人であっても暴力を振るわれた¹⁸⁾。そうした状況下において、効力を発揮することとなったのが「琉球による変装」、すなわち、「内地人」を沖縄出身者として偽装することによる報復からの救出であった。

敗戦に至るまでは、沖縄出身者であるために被る差別を恐れた一部の沖縄県人は、内地の他府県への転籍といった手段を用いてその出自を隠蔽することがあった¹⁹⁾。しかし、そうした沖縄人としての身分が、戦後は一転して命拾いの手段として活用されたのはまことに皮肉であったといえよう。

また、台湾人には、沖縄と台湾の親密な関係性を、一つの「琉球」として把握する傾向もあった。例えば、羽地栄は親しい間柄の台湾人職員から投げかけられた言葉に驚かされた思い出を次のように記している。

日ごろじっこの台湾人職員に、「羽地さんは琉球だから帰らんでよいでしょう。元は一つだから——。」と、残留をすすめられた。厚意はともかく、琉台同祖の歴史的意識が、彼らの胸中に秘められていたことを知り、改めてびっくりさせられた²⁰⁾。

その「琉台同祖の歴史的意識」がどれほどの台湾人によって共有されるものであったかは計り難いとはいえ、そのような基盤の上に台湾人と沖縄人に一体感と親近感が存在していたという指摘は興味深い。また、羽地は引揚げの際にみられた近隣の台湾人との交流について、台湾人と沖縄人が言語と身体上の装飾等の共通性をあげて次のように回想している。

大和口のできない共通性からか、あるいは母と祖母の手の甲の入れ墨に親近感を抱いてか、隣の藩さんという台湾人と、家族ぐるみのおつきあひとなり、引揚時には、たんすや、みずや、世帯道具まで、この藩さ

んに贈った。たとえ、身振り手真似のぎこちなさといえども、真心の触れあいは、尽きぬ名残の送別まで催し、惜別の情に涙ぐむ情景は、国境を越えた人種差別のない真の人間愛の像をここに私は見た²¹⁾。

沖縄と台湾の双方の土地に持ち込まれた、日本本土の人間が操る言語としての「大和口」を十分に解せない不自由さ。そして母親と祖母の手の甲に刻まれた「ハヂジ」が示す独自の民俗風習。そのような言語と身体装飾に代表されるような共感と親近感は、「内地人」には感じることのできない台湾人と沖縄人特有のものであったろう。

日本の敗戦によって台湾側への親密性が強調され、台湾人からは内地出身者よりも親近感をもって接せられる状況が見受けられた沖縄出身者であったが、その一方で、先に引揚げるのが求められた「内地人」からも、台湾人と比較した場合、「同じ日本人」というつながり・連帯感が引き出されるような状況が見受けられたという。

例えば、引揚げの際に課された制限は非常に厳しく、物品への制限はもちろんのこと、所持金も1,000円の現金しか携帯が許されなかった。そのため、一足先に日本へ送還される「内地人」からは、持ち帰ることのできないお金が「沖縄出身者である」という理由で贈られることもあったといい、宮城普仁はこの思い出について次のように述べている。

引揚者の中には、お金を相当所持されていた方が多くおられた。所持金に制限があったため、残りの所持金は台湾人にくれるより、同じ日本人であるあなたにあげたほうがよいと言われて、多くの方々からお情けのお金を頂いた²²⁾。

上述の羽地が挙げた事例と照らし合わせた場合、宮城による経験は、台湾人からは「内地人」とは異なる「同祖」の対象として見られながらも、その一方で、「内地人」からは、台湾人とは異なり、「同じ日本人」として見られていたことを示す、いわば「琉球／沖縄」の重層的な帰属性の認識を表すようなエピソードであったといえよう。1945年8月15日とその後の引揚げにまつわるこれらのエピソードは、「内地人」とは異なる沖縄出身者のアイデンティティの両義性を映し出すものであった。それは換言すれば、日本と台湾（もしくは中華世界）の境界に位置づけられる存在としての「琉球／沖縄」の柔軟性こそが、帝国日本の秩序が崩壊するなか、むしろ周辺化されてきた者同士でしか感じることのできない共感と連帯感を引き出すうえでの“強み”として機能したことを端的に表す事例であったようにも思われるのである。

III. 『琉球官兵顛末記』にみる沖縄—台湾

次に、『琉球官兵顛末記』から終戦時の状況にかかわる沖縄出身者の回想をとり上げ、ここから同様に台湾人—沖縄人、そして中国人—沖縄人の関係性について見ていきたい。

日本の敗戦によって中華民国が戦勝国となり、日本兵が武装解除されるなか、台湾にいる沖縄出身者は日本の本土出身者とは異なる「琉球籍」として位置づけられ、区別される存在であった。沖縄出身者による部隊は、旧台湾総督府に移駐させられ、そこでは「琉球籍官兵集訓大隊」（以下、琉球官兵、琉球兵）の看板が掲げられた²³⁾。

戦後直後、統治者としての権威を振りかざし、高圧的な態度によって台湾人から忌み嫌われていた一部の日本人は台湾から放逐された。そのような事例について、それが一般社会での現象に限らず、軍隊でも同様の状況が見られたこと、しかしながら、沖縄出身者に対する台湾人の態度は異なっていたことが知名定善の回想では次のように語られていた。

これまで台湾統治の主役だった日本人は、一転して、敗戦国民に転落し、台湾人の配下になり、主客転倒したのである。日本統治時代、台湾人を馬鹿にし、横暴を極め、無茶振舞いをした日本人は敗戦を機にその仕返しに会い、大変な苦境に遭遇して、這々の体で闊船で、台湾を逃げ出したという話を聞かされた。

軍隊でもこれに似たような話はあった。いわゆる部下をひどくいじめた上官が、台湾出身の兵隊にひどい目にあわされたという話²⁴⁾があった。ところが、沖縄人は中国と何か縁があったのではないかとということで、沖縄出身の兵隊には、やさしく親しそうに話しかけてきたことを覚えている²⁴⁾。

台湾人が沖縄人に対して親近感を持っていたことについては、同様に、宮里朝光も次のような回想を残している。

台湾人は、在台日本人にはよい感じを持っていなかった。特に巡査に対してはひどかったが、軍人には寛大だった。その中でも沖縄出身者には琉球人として親近感をよせてくれた²⁵⁾。

これらの回想からも、「琉球人」は日本人とは異なる心理的な「近さ」があったことが示されている。しかし、親密さが示されていたのは台湾人に限らず、台湾を接収した「祖国」中国（中華民国）からやって来た中国人も同様であった。

他の少なからぬ回想では、基隆の港で引揚げまでの間

に待機させられている日本人に対して、中国兵が厳密な所持品検査を実施し、腕時計や金品等を没収していた情景の描写が残されている。そこで描かれる中国兵は、台湾で戦利品を貪る抜け目ない戦勝者としての「接收者」の姿であるといえる。しかしながら、そのような「中国兵＝接收者」のステレオタイプには収まらないエピソードも残されている。例えば、比嘉賀友は、沖縄からの疎開者であった貧しい身なりの婦人が引揚げ船に乗る前に、一人の中国人憲兵が見せた人間的な優しさに心を動かされた思い出を次のように回想している。

台湾に永く住んでいた者〔引用者注：日本人〕は裕福な人が多く、それはまるで引越しかと思われる程多くの荷物を携行し、しかも選り抜かれた高価な品物ばかりだった。それに引き替え、沖縄からの疎開者は、服装も貧しく、所持品もお粗末で、使い古された煙草盆、タライ、洗面器、鍋、釜類など後生大事にかまえていて、誠にあわれな姿であった。ある日、このような情景を見るに見かねた中国軍憲兵が、本土帰還者の山のように積まれた荷物の中から、新調の布団一枚を抜きとって、沖縄の気の毒な疎開者の夫人へわけ与えるのを目撃し、私はいたく感動した²⁶⁾。

終戦から引揚げの間、沖縄出身者は（すべてに該当するわけではないが）台湾人だけでなく中国人からも親しみをもって、そして慰めの感情も込めて接せられることが多かったといえるが、それはつい先日まで敵同士であったはずの沖縄人兵士に対する中国人兵士の態度にも同様であった。最後、琉球兵がついに沖縄へと引き揚げられる際には、一部の中国兵は琉球官兵に対して手を振りながら彼らの離別を惜しんだといい、太田守良はこのことを次のように回想している。

在留邦人の引き揚げには、あれだけ厳しかった中国兵も、我々残留〔引用者注：琉球官兵〕部隊には意外に寛大で、出港の際は、数人の中国兵が岸壁で手を振って、別れを惜しんで見送っていた姿は、今でも脳裏に浮かんでくる²⁷⁾。

『琉球官兵顛末記』には、他にも琉球官兵に対して寛大な処置と態度で臨んだ「忘れ得ぬ」中国兵についての回想が残されている²⁸⁾。このように、彼らにとって中国兵とは、敗戦国民となったものの、必ずしも沖縄人にとっては報復や凌辱を受ける相手ではなかったといえる。中国兵と琉球兵の戦後初期の交流を見た場合、たとえば言葉は通じずとも、一部の沖縄人の記憶のなかには、むしろ親しみをもって心を通わせる中国兵の存在とそうした情

景が記憶されていたということは忘れてはならない点であろう。

引揚げ業務とその実施に多大な貢献を果たした琉球官兵隊であったが、彼らの回想録の多くは皆、台湾で終戦を迎えたことの幸せを強調していたことに共通していた。この点について、例えば知花成昇は、「内地人」引揚げ後の業務内容と中華民国軍の下にあった琉球官兵の恵まれた境遇について次のように綴っている。

琉球籍官兵善後連絡部は中華民国軍隊の指揮監督の下におかれていたので、その命令で、毎日百人程度の使役供出をして、市内公園の清掃、接收兵器の手入れ、物資の整頓、市街地道路の清掃、側溝深い間もしたが、シベリア捕虜の様に強制労働に服することもなく、全く身柄の拘束もなく、食料も豊富で保健衛生医療も完璧であったので、台湾で終戦を迎えた事は、最高の幸運であった²⁹⁾。

ところで、軍属ではないものの、『琉球官兵顛末記』のなかには「僑民の手記」として、本土出身者と沖縄人の戦後の「祖国」と「故郷」をめぐる同床異夢に関する一つの興味深いエピソードも渡名喜久枝によって紹介されている。

水道町の集中営では、毎朝各家庭から一人ずつ出て朝礼のようなものをやり、隊長の赤嶺先生からお話や伝達事項等があったのですが、其所では朝の挨拶の後、沖縄方面に向って「故郷遥拝」という号令で故里への挨拶をしていたのです。其の朝礼を台北大〔引用者注：台北帝国大学、戦後は国立台湾大学〕に徴用で残っていた他県出身の教授が通りがかりにその様子を見て、後日、赤嶺先生に「沖縄の人は立派だ。戦争でこんな目にあっても皇居遥拝を忘れない」と感心していたそうです³⁰⁾。

国家の首都である東京の方角に向けて拝む「皇居遥拝」と、他方、郷里である沖縄の方角に向けて拝む「故郷遥拝」。それは、その悲惨な実情について自ら赴いて確認することのできない虚しさと歯がゆさも含んだ行為として行われていたようにも見えるが、日本という天皇制国家に忠誠を誓う儀式としての「皇居遥拝」ではなく、むしろ、熾烈な地上戦で焦土と化した故郷の沖縄に向かって行われていた哀悼の儀礼が「故郷遥拝」であった。

文面から推察する限り、「こきょう」（故郷）を「こうきょ」（皇居）と言い換えることで、その両者が聞き間違えられることをあえて想定していた行為であったとは考えにくい。しかしながら、もし仮にそのような聞き間

違いをも想定に入れた行為であったとするならば、この巧みな「変装」からは、戦後初期台湾における「内地人」とは異なる沖縄出身者としての心情、すなわち日本本土出身者と沖縄人のある種の同床異夢が介在していた可能性を示す一事例として読み取ることもできるのかもしれない。

IV. 『回想蓬莱島』にみる台湾文化と沖縄文化

『琉球官兵顛末記』の続編である『回想蓬莱島』では、前者同様に「琉球兵」の台湾体験が綴られている。ここでは、台湾に移動して経験した、軍隊での体験と終戦・引揚げの様子が描かれているが、医者であった当山堅一が直面したのは、日本の敗戦に伴い日本政府からの支援が打ち切れ、台湾で孤立状態に置かれることとなった集団疎開者の処遇の問題であった。

敗戦と共に最初に困ったのは、働き手を沖縄に残し、台湾の山間僻地に爆撃を避け、肩を寄せ合うように細々と暮らしていた沖縄からの婦女子疎開者の生活だった。敗戦で政府からの手当はなくなる、働き手はなし。その上食料不足と赤痢やマラリアにかかり次々に倒れていったのである³¹⁾。

疎開者の多くは宮古・八重山出身者であったが、沖縄で戦火に巻き込まれないために台湾への疎開を要請されたものの、移動の果てに、結局は異郷の地で命を落とさざるを得なかった人々も少なくなかった³²⁾。

終戦によって苦しい境遇に置かれることとなったのは、生存者も同様であった。稲福全志は、荷車引きとして“転身”した状況を次のように記していた。

台北では荷車引きをして生活費を稼いだ。客は本土引揚げ者。柳行李（やなぎごうり）一個の運び賃が10円。7、8個積み、官舎街から台北駅まで3往復ぐらいすれば生活費は稼げた³³⁾。

引揚げのために基隆へ向かう汽車に荷物を載せるため、かつて勤務していた官舎街から台北駅に移動しなければならぬ日本本土への引揚げ者が顧客であったが、しかしながら、こうした労働は沖縄出身者に特別なものではなかった。かつて植民地時代のヒエラルキーでは最も優位な立場に置かれていた「内地人」であっても、糊口をしのぐため、生活のために肉体労働に従事しなければいけなくなったのが戦後直後の状況であった。

また、『琉球官兵顛末記』と同様に、中国兵の進駐についての記述も残されている。そこでは、日本軍の装備

を接收することによって変身した中国軍の姿が、当山堅一によって以下のように残されている。

終戦の翌月の9月には早くも天秤棒をかついで雨傘を背にした中国軍が進駐してきた。10月10日の双十節には日本軍から接收した軍服軍靴で装備し、威風堂々と台北市内を進行。その時から天秤棒や雨傘は見当たらなくなった³⁴⁾。

雨傘と天秤棒を担いで渡台した中国兵はほとんどが草鞋履きであったが、それら「雨傘草鞋軍隊」も、接收した装備を身に着けて、戦勝者としての「軍服軍靴軍隊」へとその身を変えた。しかしながら、戦勝者であっても、引揚げの際には前述の回想と同じく、「琉球人」への対応が本土出身者に対するそれとは異なっていたことについて、当山堅一は次のように回想している。

やがて時間になると十数人の中国検査官が来て我々帰還民の荷物検査が始まった。

琉球に対する厚意であるのか、恐れた程もなく検査は簡単に済んでOKと中国兵は帰ってしまった³⁵⁾。

戦々恐々と臨んだ荷物検査であったが、拍子抜けともいえるような中国兵の対応ぶりは、「琉球に対する厚意」として、やはり「琉球人」への親近感にその理由が求められていた。

なお、引揚時の最後の別れの時にあつては、人間同士の心を通わせながらの離別の瞬間であったことが、当山堅一による次の回想で描写されている。

船が基隆の岸壁を離れるや、突然突堤の台湾人が爆竹を鳴らし、航海の無事を祈念してくれた。吾々は、川平朝申作詞の「さらば台湾よ、またくるまでは…」を歌い、離れていく台湾の山々を感慨深く数々の思いをこめて日が暮れるまで見守った³⁶⁾。

これらの記述からは、前述した『琉球官兵顛末記』の回想と同じく、平和裏に進んだ接收と帰還の様子が伝わってくるものであった。

ところで、『回想蓬莱島』には、現地遭遇した台湾人との出会いを通じて得られた“沖縄／琉球”の重層的な文化と歴史に関する興味深い“発見”も紹介されている。當間盛行は、台湾中部・斗六の市街から南に行った先の第71師団司令部の駐屯地での巡視中、民家の庭先で、台湾現地の風習を目の当たりにし、台湾漢人である現地老人に対して行った問答を以下のように回想している。

毛抜きされた白い肌の小豚と数々の供物が飾られ、其の前中央の地中に立てられた細い竹の先端に挟んだ三角形の赤白の紙を見る。不意の闖入者に疑惑の眼差しの老主人に、三角形の紙を指さし、

「これには佛の絵があるでしょう」

無言の老人に再び尋ねる。

「これに五色の紙が中に挟んで有ると思いますが…」

「ああ、琉球人か」

と笑顔になる。息子は琉球兵かと問う、

「私のところではこれを御天地紙別うてんじかひの名を恩申紙うんもうしかひと云います」

紙に書き息子に渡す。家人達は文字と私の顔を交互に見ながら何やら声高に話し合っている。大きな竹の皮一杯に包んだ饅頭を老婦人は笑みを浮かべて差し出す。お礼を述べ、家族の再来の声を後に聞く。沖縄の拝む習慣も唐の国から渡来したものか珍しい出会いでありました³⁷⁾。

琉球兵は、本来台湾で生を受けた「湾生」（台湾生まれの日本人）や、進学や就職のために現地に居住していた沖縄出身者とは異なり、戦争という非常事態によって動員され、台湾に移動していたことから、他の長期滞在者に比べれば、現地住民と直接交流する機会はその多くはなかったはずである。しかしながら、そうした琉球兵にとっても、豚と供え物、三角形の紙に沖縄で慣れ親しんだ風景と記憶を重ね合わせて、思わず現地の台湾漢人の老人に問いかけた當問のように、日本文化の枠組みの中で周辺化されがちであった沖縄の歴史および文化のルーツに改めて向き合い、再考することを可能としたのも—それが、戦争という非常事態に伴う、「影としての移動」であったとしても—台湾への移動によってもたらされた出会いによるものであったといえよう。

軍人軍属にとっても、戦争による移動が可能にした台湾への移動は、“沖縄／琉球”の重層的な文化と歴史を見つめ直す一つのきっかけにもなった。やがて、台湾という地に足を踏み入れたことで認識可能となった、日本以外の世界と結びつく自己像の“発見”と海を跨る文化的紐帯の感覚は、沖縄と台湾をつなぐゆるやかなつながりとして、戦後の沖縄の復興にも寄与していくこととなったようにも思われるのである³⁸⁾。

V. 敗戦・引揚げにまつわる回想

—「湾生」のオーラルヒストリーから

次に、これまでの回想録で見ることのできた、日本敗戦に伴う終戦直後の主客転倒の状況や、「琉球人」という立場の特殊性および台湾人から向けられていた親近感、

沖縄人と台湾人の緊密さについて、オーラルヒストリーとして採集した2名の「湾生」沖縄人のインタビュー記録を用いながら確認してみたい。

1人目は、沖縄本島出身の両親の下に台湾に生まれた玉城靖志である。玉城は花蓮港庁玉里郡富里で暮らし、終戦時において11歳であった。父が戦死し、空襲により母を失った玉城は、嘉義にいる叔父のもとに身を寄せることとなったが、嘉義到着後わずか4～5日で終戦となり、日本敗戦直後に目撃した日本人に対する報復の光景を次のように回想している。

（敗戦の知らせを聞いて）社宅に着く頃にはもう、この台湾人の日本人に対するむごい仕打ちが始まっていたのをよく覚えております。（略）家族の前で殴打するのを目の当たりにして。「ああ、戦争に負けるってことはこういうことなんだ」ってことを子ども心に恐怖を覚えたことがありましたね³⁹⁾。

敗戦直後の主客転倒の状況について、台湾人に厳しく当たり、憎まれていた特定の日本人に対しては、すでにその日のうちに台湾人の報復処置が開始していたことが玉城の記憶にも鮮やかに残されていた。だが一方で、「琉球人」という立場の特殊性についても、仲良くしていた近隣の台湾人の遊び仲間との以下のやりとりの回想から見ることができる。

（略）「家から出るな」ってことでお達しが出ていたんで、家の中にいると、そこでも台湾の子どもたちがいっぱいいました。「遊びに行こう」って誘われて。それで、「いや、僕は「今出るな」って言われてる」って言ったら、「お前琉球だろ、琉球は大丈夫なんだよ、一緒に行こう」って言うんで、大きな川があったけど、川へ行ったらエビとったり魚とったりしたという記憶があります。

「琉球」という属性の保持と主張により、日本人であれば被るかもしれない身の危険を回避できるという方策は、自ら考え出したのではなく、台湾の友人たちから指南されたものであった。冒頭で紹介した羽地榮が形容したような、この「琉台同祖の歴史的意識」ないし「琉台兄弟意識」に基づく立場の特殊性をめぐっては、「琉球は兄弟」と言われた記憶について、玉城は次のように語っていた。

「なぜ琉球なのか」って聞いたら、[引用者注：台湾人の遊び仲間が]「日本人は一等国民、琉球は二等国民、三等が朝鮮と自分、台湾だ」と言ったら、もう1人が、

「いや、琉球は二等国民じゃなくて、兄弟の関係だ」と。だから、兄弟は叩かん、と。というようなことを言われた覚えがありますね。

2人目は、宮古島出身の両親の下に台湾に生まれた平良玄福である。台湾最大の沖縄人集落であった基隆の社寮島に生まれ育ち、台湾で終戦を迎えた翌年に11歳で宮古島へと引き揚げた平良は、台湾人から向けられていた親近感について、集落での沖縄人と台湾人の親密な関係性を以下のように語っていた。

台湾の人たちも沖縄の人とは、もう本当に仲が良かった。本土の人とはあんまり台湾の人は付き合いは無いけど、沖縄の人とすごく付き合いがあって、楽しかった。

ところで台湾からの引揚げ先として向かわなければいけなくなったのは、特に台湾生まれの「湾生」にとっては、家も土地も無い、故郷という感覚も無い、裸足で水汲みを余儀なくされる貧しい“郷里”であった⁴⁰⁾。引揚げ後の貧しさと、裸足で過ごした宮古での学校生活について、平良は次のように語っていた。

だから、台湾から引き揚げてきて、何にも無いもんだから、三度の飯を食べるのも難しい状態だったから、(略)中学校はね、茅葺きの校舎だった。茅葺きの校舎で、土間に机があった。冬はもう、窓も無いから寒いし、それでも中学3年までは裸足で学校を卒業した。靴履く人は何名かはいたけど、ほとんど裸足だった。(略)裸足だから冬はもう寒いし。勉強どころか。で、教科書を買うお金も無い位だから、辞典なんかますます無い。英語の単語を引こうと思ってもね、辞典が無くてできない⁴¹⁾。

ともに11歳で沖縄へと引揚げることとなった玉城と平良であったが、引揚げ後に直面することとなった苦しい生活と比較した際、かつての植民地下での台湾生活の回想に伴ったのは、故郷を失った喪失感と、いつかは戻りたいと願う懐郷の意識であった。

だが、例え彼らが経験した移動が、植民地支配や戦争を背景とし、また、敗戦による引揚げに終わった「影としての移動の歴史」としてマクロのレベルで把握されるものであったとしても、ミクロのレベルで見た場合、沖縄人にとっての台湾での歴史記憶には、個々にとって異なる輝きを秘めた、「光としての個人の記憶」があったことも指摘すべきであろう。

この点について平良は、自身の母親が死去する前に果

たした台湾旅行で、戦時中に疎開していた彰化郡芬園庄(現：彰化県芬園郷)を訪ねた際の、母親と現地住民との再会について次のように回想していた。

僕は何年前か、母を本土旅行に連れていこうとしたら、母は「台湾を一目見たい」って言うから、台湾に妹と一緒に母を連れて行ったら、「疎開地をまた見たい」って言うから、基隆を、社寮町の住んでいた所もまた見せて。母は帰ってきてからまだ一度も行ってなかったから、社寮町なんかも皆見せて、それから疎開地も連れてって見せたら、疎開地の人と抱き合って、泣きながら色々話した。(略)

母は喜んで、「自分はもう何も思い残すことはない」と。でも、100歳まで生きて。100歳で亡くなった。(略)その母が一番喜んだのは、基隆よりも、社寮町よりも、その疎開地の、わずか4カ月位だったかな。その間のことがもう忘れられないというから、そこに連れていって。そしたらすごく喜んで。何も思い残すことはないって。そう言って。

平良の母親にとって、わずか4カ月の滞在に過ぎなかった疎開地であっても、その土地と人に対して生涯忘れることのできない思い入れを感じていたとするならば、新たな国境線で分断され、日本統治下で見られた大規模な人の移動と交流が途絶えた戦後においても、彼女にとっての台湾との精神的つながりは、想像以上に強固なものであり、他者には計り難いほどの大きな意味を持っていたといえよう。

一方、玉城靖志は、出征した父親が東南アジアの作戦で戦死し、台湾の自宅の近くで受けた空襲の爆撃によって母親と弟を失い戦争孤児となった。引揚げ後1970年代半ばに台湾への“帰郷”を果たし、台湾人の元隣人との再会した玉城は、国境によって双方が別国家に属すようになった後もなお、彼らから受け続けている優しさについて、涙ながらに次のように説明していた。

でも言えることは、台湾の人たちは私に対しては好意を持っていてくれたのだと感じています。だから今でも、ここでいうシーミー(清明)ってあるでしょ。(略)

台湾は、(清明が)昨日だったかなんですよ。「お前んとこのお母さんの分まで線香あげたから安心しろ心配するな」って昨日も夜遅くに電話が入ったりして。(涙ぐむ)

空襲で命を失った母親の供養をかつての隣人が今もお続けられていることを涙ながらに述べていた玉城が

伝えようとしていたのは、清明節の先祖供養という沖縄と台湾の共通する文化への親近感のみならず、人間同士に共通する優しさと温情に向けた溢れんばかりの感謝であった。終戦直後の主客転倒の状況、「琉球人」の立場的特殊性、そして沖縄人と台湾人の親密さについて玉城と平良の両者によるオーラルヒストリーから見えてくるのは、個人がそれぞれの胸の内に秘める、「影としての移動の歴史」のなかに輝く「光としての個人の記憶」と、現在にまで続く台湾とのつながりであった。

これらの証言は、加害—被害の二項対立として把握されがちとなる「日本—台湾」の植民地支配の公式の歴史からは見えてこない、むしろそこからは抜け落ちてしまうものである。ただし、「宮古にもね、台湾帰りの人はいっぱいいたけど、僕よりも後輩なんかは、もう台湾のことは全然わからない」、「先輩なんかは、僕が気が付いた時にはもう亡くなって」、「僕らの年代になるとね、来年の保障が無い」と平良玄福が述べていたように、世代交代が進んだ結果、植民地統治に加担する側に立っていた沖縄人の加害者性という側面について、その事実を当事者として語ることのできる者は減少の一途をたどり、もはや皆無に等しい。そのため、失われていくそれらの多くの記憶については、時代とともに移り変わる、異なる世代の“語り”の重心の転移と変容を、手記とインタビューの相違として把握することも肝要であろう。

個別の経験を歴史化することの困難は伴うものの、当時の実情を知る人間を探すこと自体が困難となっていく状況下にあつては、記憶や回想を用いた研究を進めることがますます重要になってくるであろう。こうした証言の記録化と記憶化から見えてくる、実際の人間同士の交流のあり様から未来志向の関係性構築の糸口を提示していく、その重要性が示されていると思われるからである。

VI. むすびにかえて

以上、本稿では、1945年まで同じ帝国日本の版図として自由な人の移動があり、なおかつ隣接する地域として沖縄から多数の移住者を擁していた台湾、特に日本敗戦によって生じた国境の変容の下でのさまざまな変化、なかでも「内地人—沖縄人—本島人」の関係性とその変容をめぐって検討を行った。

冒頭で示したハワイ、北米や中南米といった方面への移民と開拓—「光としての移動の歴史」—が、経済的にも、言語的にも、立場的にも現地住民に対して弱者として位置づけられる沖縄出身者の、現地での過酷な生活・労働環境の克服と、経済力を身に付けて社会的上昇を実現していった苦難と栄光を語り継ぐ歴史とすれば、他方、台湾をはじめとするかつての「外地」への移民—「影とし

ての移動の歴史」—は、植民者として、現地住民に対して上位にあった立場が日本の敗戦によって逆転し、凋落に終わることとなった歴史であった。

とはいえ、本稿で検討してきたことから明らかとなったのは、そうした「影としての移動の歴史」として一般的に把握されがちな歴史であっても、当事者および地域間の事後のつながりを見た際に、個別的には確かに「光」としての側面—「光としての個人の記憶」—が幾つも存在していたという点である。

個別の体験や経験に着目し、沖縄—台湾間の人の移動によって構築されてきた国境を越えたつながりとその意義を引き続き明らかにしていくことは、一国史では見落とされがちとなる史実に光を当て、両地域のこれからの発展的な関係性を思考するうえでもきわめて必要である。とりわけ、戦後70年を経て、史実として確実に記憶されていくナショナルな歴史が残されていく一方で、公式の歴史記憶からは抜け落ちてしまう草の根レベルでの“同時代的感覚”を記録化し、共有化することの重要性は一層求められていくのではないだろうか。

本稿はあくまで初歩的な考察に止まるものであるが、これからも、例えば沖縄—台湾間の人の移動をめぐる研究が植民地支配や戦争を背景とした「影としての移動の歴史」であっても、「光としての個人の記憶」を示していくことにより、加害—被害の二項対立を超えた史観の共有化が求められていくであろう。それは、そうした営為を通じて見えてくる姿を基盤として、草の根レベルでの人的接触・交流の記憶から再構築され得る地域像と歴史像によってこそ、事後において一面的な歴史観のなかに収斂されがちな自己／他者像の克服、および東アジア地域内における相互理解と未来志向のつながりの深化に向けた希望が見いだせるように思われるからである。

【付記：本研究は、名桜大学研究基盤形成事業「環太平洋を中心とする沖縄から／への〈人の移動〉に関する総合的研究」東アジア研究班による成果の一部である。】

注

¹⁾一例として、「沖縄の地政学的・歴史的経験を深化させ、沖縄が持つ固有性と普遍的な価値を内外に提示しつつ、普遍的な知見の発信をめざすことを目的」（山里勝己）とし、琉球大学で2008-2012年度にわたり実施された研究プロジェクト「人の移動と21世紀のグローバル社会」（文部科学省特別経費プロジェクト）では全10冊の成果が刊行されている。そのなかで、本稿が目指す沖縄—台湾の人の移動に関連した論稿には、基隆・

- 社寮島の沖縄人集落を扱った朱徳蘭の研究や、戦後沖縄本島および宮古島の台湾系華僑の移住を扱った呉俐君の研究などがある。我部正明・石原昌英・山里勝己編『人の移動、融合、変容の人類史—沖縄の経験と21世紀への提言』彩流社、2013年。
- 2) 米山裕「環太平洋地域における日本人の移動性を再発見する」米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動—在外日本人・移民の近現代史』人文書院、2007年、9-23頁。
- 3) 早期の研究には、水田憲志「沖縄県から台湾への移住—第二次世界大戦前における八重山郡出身者を中心として」（関西大学文学部地理学教室編『地理学の諸相—「実証」の地平』大明堂、1998年）がある他、近年では、例えば、大浜郁子「沖縄出身者の台北師範学校における台湾教育経験と沖縄の「戦後」復興への取り組み」（松田利彦・陳延媛編『地域社会から見る帝国日本と植民地 朝鮮・台湾・満洲』思文閣、2013年、555-576頁）。松田ヒロ子「近代沖縄の医療と台湾—沖縄県出身者の植民地医学校への進学」（『移民研究』第9号、2013年9月、97-122頁）。八尾祥平「戦後における琉球華僑をめぐる記憶と忘却—「石垣市唐人墓建立事業」を事例に」（吉原和男編『現代における人の国際移動—アジアの中の日本』慶應義塾大学出版会、2013年、169-179頁）など。ここでは全てを紹介する紙幅の余裕がないため、一部の紹介に止めておくが、八尾祥平の整理によれば、沖縄—台湾の人の移動の先行研究に関しては、又吉盛清、大浜郁子、泉水英計、星名宏修、松田ヒロ子、水田憲志、小熊誠、野入直美、松田良孝などの名前が挙げられる。八尾祥平「戦後における台湾から「琉球」への技術導入事業について」蘭信三編『帝国以後の人の移動—ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点』勉誠出版、2013年、637-638頁。
- 4) 野入直美「沖縄における台湾引揚者の特徴—引揚者在外事実調査票と県・市町村史の体験記録を中心に」蘭信三編、前掲書『帝国以後の人の移動—ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点』、305-350頁。
- 5) 同上。
- 6) そうした日本植民地下台湾における沖縄からの人的移動という「影としての移動の歴史」について、いち早く問題提起を行ったのが又吉盛清であろう。又吉は、「台湾植民地支配の歴史は、沖縄人が虐げられ差別された歴史であると共に、加害者として台湾、中国、朝鮮やアジア人に対峙する歴史でもあったといえまいか」とその先駆的研究のなかで指摘している。又吉盛清『日本植民地下の台湾と沖縄』沖縄あき書房、1990年、377頁。
- 7) この約3万人という数字は、1940年には在台沖縄籍民が14,695名、1945年9月末には沖縄本島および宮古・八重山からの疎開者が12,939名、南洋群島から一時的に台湾に滞留させられていた沖縄籍民が1,597名おり、その他にも、他の都道府県に転籍したために統計から漏れた者、ヤミ船で引き揚げた者、2千数百名の沖縄籍の軍人軍属などを合計し、引揚者としては3万人ほどの在台沖縄出身者がいたはずであるとする中村春菜の分析に依拠している。中村春菜「戦後台湾における沖縄籍民の引き揚げの様相—「琉球官兵」の形成過程とその役割」『沖縄文化』第49巻第2号、2015年4月、35頁。
- 8) 沖縄から台湾への疎開は、第二次世界大戦中に日本の戦局が悪化した1944年に実施され、約1万人が渡台したとされる。疎開者には、台湾にいる家族や知人を頼って渡台した「縁故疎開」と、台湾に身寄りのない人々が集団で渡台した「集団疎開」があったが、前者に対して後者の集団疎開者は食糧難やマラリアに苦しまされ、棄民状態になる場合もあったという。詳細は、松田良孝『台湾疎開—「琉球難民」の1年11ヵ月』（南山舎、2010年）に詳しい。
- 9) 日本統治下の台湾では、本土出身者は「内地人」、台湾人は「本島人」、沖縄出身者は「沖縄人／琉球人」などの呼称が使われた。沖縄出身者については、元来「琉球」が歴史的に中国側から名づけられたことから、日本人としての立場からは「沖縄」の呼称が強調された他方、台湾人側からは「琉球人」と呼ばれる傾向にあった。しかし、差別意識を含んで使用される場合もあったため、又吉盛清によれば、「在台の沖縄人は『琉球人』と呼ばれることを極端に嫌い、この言葉に敏感な反応を示した」とされる（又吉、前掲書、255頁）。本稿では、歴史的に使用されたそれらの呼称を括弧つきで用いることとする。
- 10) 本稿の問題意識の設定や考察方法に関しては、上述した野入直美の研究および星名宏修の次の研究から多くの示唆を得た。星名宏修「「植民地は天国だった」のか—沖縄人の台湾体験」西成彦・原毅彦編『複数の沖縄—ディアスポラから希望へ』人文書院、2003年、169-196頁。なお、同論文が収められた研究成果として、星名宏修『植民地を読む—「鷹」日本人たちの肖像』（法政大学出版局、2016年）があり、植民地における多様な関係性を考えるうえで参考になる。
- 11) 野入によれば、沖縄出身者の台湾体験が収められた市町村史は、1970年代：1冊、1980年代：10冊、1990年代：7冊、2000年代：11冊、そして2010年に2冊が刊行されたという。それらの分析については野入の研究を参照のこと。本稿では、主として野入および星名がす

に検証した市町村史の記録以外の史料を対象として分析を試みたい。野入, 前掲論文, 305-350頁。星名, 同上。

- ¹²⁾ 台湾引揚記編集委員会編『琉球官兵顛末記』台湾引揚記刊行期成会, 1986年。
- ¹³⁾ 台湾友の会編『回想蓬莱島』沖縄建設新聞, 1996年。
- ¹⁴⁾ 台湾協会編『台湾引揚史—昭和20年敗戦記録』台湾協会, 1982年。
- ¹⁵⁾ 川平朝申は1908年に沖縄県伊是名島に生まれ, 1924年渡台, 台湾ラジオ新聞編集局長, 台湾総督府官房情報部等で勤務し, 終戦による沖縄引揚げ後は沖縄民政府文化部芸術課長, 米国琉球軍政府情報部放送部長, 琉球放送局局長等を歴任した。著書に『終戦後の沖縄文化行政史』(月刊沖縄社, 1997年)等がある。三島わかかなの整理によれば, 川平朝申研究には, 泉水英計による文化人類学的アプローチ, 齋木喜美子による児童文学研究, 川島淳による史料科学的研究, 齋木喜美子・世良利和による映画研究がある。三島わかかな「ラジオドラマと音楽—川平朝申の脚本集を事例に」『ムーサ沖縄県立芸術大学音楽学研究誌』第17号, 2016年3月, 53頁。
- ¹⁶⁾ 川平朝申「異国化した沖縄へ」, 台湾協会編, 前掲書, 67-68頁。
- ¹⁷⁾ この一例としては, 「台湾植民地当時, 台湾人をいじめた人たちは, 足を切られて病院に運ばれたり, また, いばっていた日本人の奥様たちも, 台湾人になぐられたり, 中には, 夜逃げする人も多かった」というように, 日本人への激しい報復, しかもそれが男女の差なく行われたことが示されていた。仲間秀夫「漁船で郷里・宮古島へ」台湾協会編, 前掲書, 281頁。
- ¹⁸⁾ しかしながら, 「…日新橋の上では, 戦時中日本人警察官に拷問されたという台湾人から, 仕返しされていた。午前2時ごろ『羽地さん, 助けてくれ』と, 戸をたたかれ, りつ然。台中の譜久村さんであった。黒板に, 『一級戦犯譜久村先生』とあったので, 妻子は置き去りにして, 独り逃亡してきたという」といった回想でもわかるように, 内地人であれ沖縄人であれ, 高圧的な態度で台湾人に接した者はともに激しい報復を受けたのであった。羽地栄「来々軒は生きている」, 台湾協会編, 前掲書, 141頁。
- 終戦後の沖縄人に対する「台湾人の豹変」に関する事例は, 上述した星名の論稿でも一部紹介されている。星名, 前掲論文, 182頁。
- ¹⁹⁾ 戦前の台湾で弁護士, 戦後の沖縄で政治家として活躍した安里積千代の娘である大城光代も, 幼少の頃(台南の南門国民学校在籍時)の回想として, 沖縄姓で沖縄の顔立ちをした転入生が他県出身であったことを不思議に思いそのことを父親に伝えたところ, 父の積千

代は, 「蔑視されることを避けて他県に転籍する沖縄出身者がいる」こと, しかし自身は「沖縄県人であることに誇りを持っているため出身を隠したりしない」ことを教えてくれたという。大城光代『世の光 地の塩—沖縄女性初の法曹として80年の回顧』琉球新報社, 2014年, 29-30頁。

- ²⁰⁾ 羽地栄「来々軒は生きている」, 台湾協会編, 前掲書, 140頁。
- ²¹⁾ 同上, 140-141頁。
- ²²⁾ 宮城普仁「新米巡査の手帳」, 台湾協会編, 前掲書, 174頁。
- ²³⁾ 「琉球籍官兵集訓大隊」の詳細やその果たした貢献については, 前述した中村春菜の研究を参照されたい。中村, 前掲論文, 18-41頁。
- ²⁴⁾ 知名定善「台湾軍時代の思い出」, 台湾引揚記編集委員会編, 前掲書, 65-66頁。
- ²⁵⁾ 宮里朝光「私の戦争体験と平和」台湾引揚記編集委員会編, 前掲書, 173頁。
- ²⁶⁾ 比嘉賀友「薬と兵隊回想記」台湾引揚記編集委員会編, 前掲書, 129頁。この比嘉の回想については, 星名宏修の論稿でも引用されている。星名, 前掲論文, 195頁。
- ²⁷⁾ 太田守良「思い出, あれこれ」台湾引揚記編集委員会編, 前掲書, 43頁。
- ²⁸⁾ 例えば, 平敷善福は「忘れ得ない中国人!!」との見出しで, 3名の中華民国軍の謝大佐, 鐘少佐, 日僑管理委員会の周委員長の名前を挙げ, 彼らが示した寛大な対応について記している。平敷善福「琉球籍官兵集訓大隊での私」台湾引揚記編集委員会編, 前掲書, 144-147頁。
- ²⁹⁾ 知花成昇「私の戦時名簿」台湾引揚記編集委員会編, 前掲書, 75頁。
- ³⁰⁾ 渡名喜久枝「敗戦の陰で」台湾引揚記編集委員会編, 前掲書, 280頁。
- ³¹⁾ 当山堅一「私の台湾戦後史」台湾友の会編, 前掲書, 11頁。
- ³²⁾ 避難のために台湾に疎開していたはずの疎開者であったものの, 病気や食料不足などから, 集団疎開者の死亡率は少なくなかったという。松田良孝の整理によれば, その一例として, 1944年後半に台中州南投郡南投街に疎開していた沖縄の集団疎開者の死亡率が8.55パーセントにも上っていたとされる(152人中死亡者13人, 特に幼児は高死亡率)。松田, 前掲書, 104-105頁。
- ³³⁾ 稲福全志「私の戦後史」台湾友の会編, 前掲書, 1頁。
- ³⁴⁾ 当山堅一「私の台湾戦後史」台湾友の会編, 前掲書, 15頁。
- ³⁵⁾ 當山堅次「台湾沖縄県人会連合会」台湾友の会編, 前掲書, 29頁。

- ³⁶⁾ 当山堅一「私の台湾戦後史」台湾友の会編，前掲書，22-23頁。
- ³⁷⁾ 當間盛行「台湾軍一兵卒の思い出話」台湾友の会編，前掲書，120-121頁。
- ³⁸⁾ 例えば，軍人として台湾に滞在していた宮里松次は戦後に東村の村長となったが，彼が台湾時代に培った経験と人的支援は，同村に導入したパイナップル産業を「日本一のパイナップル村」へと成長させるなど，直接的・間接的に大きな役割を果たした。その他，沖縄人による台湾での経験が戦後沖縄の復興に果たした貢献に関しては，前述した大浜郁子が教育方面について，松田ヒロ子が医療方面について論じている。
- ³⁹⁾ 玉城靖志（湾生＝台湾生まれ，1934-46年まで台湾在住）へのインタビュー（聴き取り日時：2014年2月20日，3月2日）。菅野敦志「「湾生」沖縄少年の戦争体験と引き揚げ―玉城靖志オーラルヒストリー」『名桜大学紀要』第21号，2016年3月，67-76頁。
- ⁴⁰⁾ 台湾からの引揚げ後，多くの沖縄人は，靴を履き水道があり食べ物に事欠かなかった豊かな台湾での生活から一転して，裸足で水汲みを必要とする困窮生活を余儀なくされた。一例として星名は，家も土地も無くした引揚げ後の苦しい生活を詠った高江洲八重子の短歌「月の夜に琴つまびきし我なるに今の生活は家も地もなし」（『八重山文化』1947年）を用いながら紹介している。星名，前掲論文，184-185頁。
- ⁴¹⁾ 平良玄福（湾生＝台湾生まれ，1935-46年まで台湾在住）へのインタビュー（聴き取り日時 2014年11月15日）。

Changing National Boundaries and Okinawan Repatriation from Taiwan after the Demise of the Japanese Empire: Using Memoirs and Oral Histories

SUGANO Atsushi

Abstract

This paper focuses on experiences and memories of Okinawan people during the repatriation process of changing national boundaries after Japan lost its colonies in 1945, which was caused by the demise of the colonial empire. Due to the Japanese military defeat, Okinawan migrants, evacuees and soldiers in Taiwan were forced to repatriate to Okinawa; however, it is important to shed light on the personal experiences of ordinary citizens during repatriation in order to promote further understanding of the issues of migration and ethnic relations of Japanese, Okinawan and Taiwanese people. As examined by utilizing memoirs and oral histories, it could be seen that Okinawan people were perceived as “Ryukyuan,” non-Japanese neighbors with close cultural and historical ties to Taiwanese people, or soldiers from mainland China. In conclusion, although migration from Okinawa to Taiwan can be regarded as motivated by colonial rule and war, a “shadowy history of migration,” the author has underscored the importance of recording and sharing personal memories of encounters and interactions on a grass-roots level, in order to prevent them from being left out from the authentic and official collective memory of national history.

Keywords: Taiwan, Okinawa, migration, repatriation, memoir